

# 大学院特別講義のご案内

日時: 2016年11月9日(月) 17:30～19:00(質疑応答時間あり)

場所: 大阪大学大学院医学系研究科附属共同研究実習センター7 階会議室

(本特別講義は、大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター主催 第12回学術セミナーとして開催されます。)

講師: 石垣 尚一 先生

(大阪大学歯学部附属病院口腔補綴科 講師)

演題: “Will today’s physical activity and sleep/arousal state affect tomorrow’s chronic pain intensity?” A brief introduction of the methodology and preliminary results.”

われわれの診療科には、「顎関節症・口腔顔面痛専門外来」が設置されており、口腔顔面領域のさまざまな慢性痛を有する患者の診察にあたっている。いわゆる顎関節症とは、顎関節や咀嚼筋の疼痛、関節(雑)音、開口障害あるいは顎運動異常を主要症候とする障害の包括的診断名である。その病態は咀嚼筋痛障害、顎関節痛障害、顎関節円板障害および変形性顎関節症であるが、約2/3に咀嚼筋の慢性痛を認める。さらに、頭部、頸肩部、および腰背部の慢性痛を伴うことが多いことから、中枢性過敏も生じていることが疑われる。

このような慢性の痛みは、睡眠の質を低下させると考えられてきたが、睡眠障害が疼痛閾値を低下させ、疼痛の慢性化や重篤化を招いているという仮説も提示されている。ただし、これらは横断的な研究結果によるものであり、因果関係を示唆したものではなかった。

一方、このような慢性痛には日内あるいは日間変動が見られることが多いため、前向きな解析を行うことができれば、睡眠状態と慢性痛との関係をより明確にできると思われる。

そこで、14日間にわたり連続して測定したデータを用い、ある1日の身体活動状態や睡眠・覚醒状態が、その翌日の慢性痛の強度に及ぼす影響を、線形混合効果モデル(Linear Mixed Effect Model)を用いて解析を試みた。本解析手法は、日々の変動を伴うさまざまな疾患データの解析にも有用と思われることから、本講演では、この統計解析手法および解析結果の一部について提示させていただきたい。

※「口の難病」セミナーを兼ねております。

講師: 杉村 光隆 先生

(大阪大学大学院歯学研究科高次脳口腔機能学講座 准教授)

演題: 「歯科における難治性疼痛の臨床と研究 — 痛みと女性ホルモン —」

口腔顔面領域の痛みは、睡眠や食生活、会話など日常生活を阻害し、患者の心身両面に与える影響は決して小さくない。また、その領域の痛覚が更年期においては変化すると言われており、我々の歯科麻酔科ペインクリニック外来でも中高年の女性患者の割合が高く、その中に不定愁訴や情緒不安定など自律神経失調状態の更年期患者も含まれる。

国際疼痛学会の痛みの定義に基づけば、痛みは感覚と情動の両面から評価することが必要であるが、口腔顔面領域の痛みを抱える更年期の女性においては、家庭や仕事などの心理社会的要因が背景に存在し、その評価は容易ではない。

本セミナーでは、そのような混沌とした背景の中で展開される歯科での難治性疼痛の臨床と、それを単純化した更年期モデル動物を用いた痛みの研究より、特に女性ホルモンとの関連について行動学的知見を紹介する。

(問い合わせ先: 歯科補綴学第一教室・石垣・内線2946)